

博物館 Dictionary No.205

◆あなたに語る・時代を超えて生きる心◆

平成知新館2F-5「中国絵画」の「奇想の画家・蘇仁山」に展示されている作品について勉強してみよう。

奇想の画家が描いた花鳥図 百鳥万歳図 (蘇仁山筆、京都国立博物館蔵)

縦二メートル半、横一メートル超もある大画面に、さまざまな種類の鳥と花木が水墨で描かれています(図1)。中国の花鳥図で、画面の中央に集まっているのはたくさんの燕たちです(図2)。画面の下のほうに眼を向けると松の木の枝で羽を休める鷹や鶴もいます(図3)。二本の鋭い燕尾が印象的なたくさんの燕や下を覗こうとして眼をみひらく鷹、フラミンゴのように首を長くした鶴など、どの鳥の描写もユーモラスで、愛くるしいものとなっています。

画面の上方にある題は最後の二文字「歳図」しか残っていませんが、たくさんの鳥が描かれていることから、「百鳥万歳図」と右から左に横書きされていたのでしょうか。鳥たちを数えてみると九十羽以上います。画面が傷んでいますので、実際には百羽すべて描いていたようです。花鳥図は華やかできれいなことから山水、人物にならぶ水墨画の三大画題の一つですが、実はそこにはさまざまな隠された意味が込められています。

燕は春先に飛びまわることから、厳しい冬が終わり穏やかな春の到来を告げるおめでたい鳥とされています。鷹は勇猛果敢な性質と「鷹(イン)」という漢字が中国語では英雄の「英(イン)」と同じ発音であることから男子の理想を表します。鶴は長生きすることから長寿を意味し、漢字の「鶴(ホー)」の発音は「和(ホー)」にも通じます。さらに画面下方をみると、鷓鴣、鶉、鳩、鶉のつがいがいます。

鷹と鶴も一組とみると五つのつがいがそろっていま

す。これは「五倫図」といって、中国の儒教で五つの根本となる教え(父子の親、君臣の義、夫婦の別、長幼の序、朋友の信、それぞれ人間関係で大切にされること)を暗示しています。このように人びとの願いや望み、あるべきすがたなどがさまざまな描写に込められた絵画を「吉祥画」といいます。いわば、これがあれば幸せになれる「縁起もの」というわけです。



図1 百鳥万歳図 蘇仁山筆 京都国立博物館蔵



図2 百鳥万歳図 蘇仁山筆（部分）

水墨のみでこれだけの鳥たちを描き分けたのは、清時代後期に中国南部の広東にいた蘇仁山（1814～1850？）という名の画家です。蘇仁山の通り名である字は長春、もう一つの名にあたる号は菩提再生身尊者、玄妙観道士、嶺南道人などとなりました。難しそうな号が示すように、蘇仁山の生涯は波瀾にみちたものでした。道光12年（1832）と15年に二度、科挙（たいへん難しい、国の役人になるための試験）に挑むも落第してしまい、以後、画業に専念しました。絵画にあわせる文章である題識はとても難解で、ときに当時の中国社会の規範であった儒

教についての批判を展開しました。性格は孤独を好み、父親との確執により不孝の罪により投獄されたともいわれています。

蘇仁山が生きた清時代後期もまた、西欧の国々との衝突がつづき、社会が混乱した時期でした。日本でいえば、江戸時代から明治時代に変わる幕末の頃です。

実はこの花鳥図、ふつうの花鳥図とは少し変わっています。中国で「百鳥図」というと、中央に想像上の霊鳥にして諸鳥の長である鳳凰を配してその周りにさまざまな鳥を描きます。もちろん、鳳凰を描かない百鳥図もありますが、しかし、その多くには鳳凰の替わりに中心となる鳥がいます。蘇仁山は慣例を破っ



図3 百鳥万歳図 蘇仁山筆（部分）

てあえて鳳凰を描かず、鷹や鶴もユーモラスに描いたところに、「奇想の画家」といわれる所以があります。さらにうがった見方では、無秩序に飛びまわる燕はかつて燕京と呼ばれていた北京での混乱を暗示するという説もあります（※）。題字の「歳（スイ）」の読みが災いを意味する「祟（スイ）」に通じ、鋭角的な燕の描写が中国の農村に大被害をもたらしていたバッタの大量発生を連想させるというのです。

実際のところ、蘇仁山がどのような思いでこの花鳥図を描いたのかわかりません。いづれにしても、奇想の画家らしくおめでたい吉祥の意味だけで描いたわけではなさそうです。悠久の歴史と広大な大地をもつ中国で描かれた花鳥図には、さまざまな意味をもちあわせた奥深い世界が広がっているのです。

※ Yeewan Koon, *A Defiant Brush: Su Renshan and the Politics of Painting in Early 19th-Century Guangdong*, Hong Kong University Press, 2014.

列品管理室 呉孟晋